



拷問館

厨二篇

FOR ADULT ONLY

其の館から生還した女は居ない……

入館したら最期、絶命する迄
性処理玩具にされるのだから——

女達が自らの死を願う地獄の責め苦。

幾度となく延命・陵辱を繰り返され
やがて訪れるであろう絶命の瞬間、
最期に耳にするのは己の断末魔であらうか……

女が只の肉塊と化す禁断の楽園——

娼館



私達ラボメンが
SERUNに
監禁されて最初に
行われた事は
集団レイプだった……


激しい抵抗に対して
組織の男達は私達を
殴り続けながら
濡れていない膣に
ペニス突き立て
容赦無く腰を打ち付ける



男達は「トウツトウルール」を口ずさみながら許しを乞うまゆりさんを犯し続ける。彼女の口癖を気に入ったかムカ付いたのだろうか


まゆりさんは鎖で吊るされながら口と膣とを交互に犯されていた。何度もザーメンを吐きもどしその度に流し込まれる大量の精液に彼女の腹筋は限界に達していた






鈴羽さんも吊るされ
研究所の男達に
犯されていたが
以前にも同じよう
目に遭った事が
あるのか彼女は
痛みを逆らわず
受け入れてる様
だった

SERUNの男達は
異様に黒目が大きく
そして皆同じ顔を
していた…
拷問しながら彼らは
「プロフィール・プロ
捨てるんじゃないか」
と繰り返していた…
SONY?




猫耳メイドの彼女も
拉致されていた…
もはや語尾に何かを
付ける余裕も無く
素の状態で嗚咽する
ばかりである
私は子宮に流れ込む
ザーメンの感触に
嫌悪を抱きつつ
正直な所ちよつと
スッキリしていた…

— と思っっていたら
男達が彼女を責め立て
ながら「ニャンニャン」
言い始めたので
私は肛門に流れ込む
ザーメンの感触に
嫌悪を抱きつつ
正直な所ちよつと
腹が立っていた…




床に押え付けられ
腔からザーメンを
噴出し体中に
塗りたくられながら
萌郁さんは必死に
携帯で「許してください」
など打って男達に
送るも完全無視

何故なら彼らの
携帯はPHSで
この地下室は
圏外だったから……




膣壁か直腸側が
擦切れ始めたのか
「痛いっ止めて
助けて下さいっ」
など普通の喋り方
で情けを乞う
まゆしい☆
やれば出来る子である

膣・肛門に同時挿入で
流石の天然キヤラも
吹き飛んでしまった
様だ
泣き喚く姿は普通の
女のそれであった…




男達のペニスは
平均男性のそれを
遥かに陵駕しており
輪姦慣れしている
彼女でさえ苦悶の
表情が出てしまっ
ている……

時折歯を食いしばって
いるのは括約筋に
力を入れて締めまりを
良くし男達の射精を
促す為だろうか




萌郁さんは大人だけあって
二本のペニスを深深と
膣奥で受け止めていた…
肛門で射精したペニスを
口に入られ何度も
吐き出す彼女の携帯は
精液と失禁した尿で
水没して壊れていたに…
防水なら良かったのに…

携帯を失った彼女は
自らの声で救いを求めな
ければならなくなつたが
口内はおろか胃の中まで
ザーメンで溢れて
しまつては叫ぶことすら
ままならないだろう—



腔・肛門・口の
動きの反応が鈍くなった
私達の肉体を男達は
破壊して行く
杭を穿たれ胸に鎖を
突き刺さし固定されながら
眼球をペニスで潰される
脚を切断されながら：
彼女の締めまりと絶叫は
限界を超える

監禁されて
何日たった
のだらう？
精魂尽き果てた
ラボメン達に
その時が来た：




拷問経験豊富でも
腕を切断された事は
無いように悲痛な
叫びを上げながら
脚をバタつかせながら
抵抗していた

結局脚を杭で
貫通させて
動かないように
されてしまったが…
腕を切り落とされるのと
眼球を潰されるのって
どっちが痛いのかな？

脚を鋸で引いていくと
目が大きく見開かれて
しまう…
抗えない痛みに
目を瞑る事が出来ない
そこにペニスが
迫ってこようとも

グチュグチュ眼球が
掻き回される音と
ゴリゴリ鋸の刃が骨を
削る音が地下室に響く
食道までペニスで
犯されてる彼女は
悲鳴を上げる事も出来ず
くぐもった音を喉の奥から
漏らすだけだった…




あまり言葉を
出さない彼女は
眼球を失った時
も
呻き声だけで
耐えていた！
それが男たちの
痛に
障ったらしく
右足以外を同時
切断されてしま
った――

その凄惨な光景に
私は胃の中身を
全て床にもどした……
胃の中には男達の
ザーメンしか入って
いなかったが――



切断時に何度も射精を
楽しんだ男達はもう彼女に
興味を失った様だ
痙攣しながら死を迎える
友人に私は何を言えば？
：呼吸と痙攣が止まり
静かに眼が閉じてゆく彼女に
私は言った
「トウツトウルーツ♪」

広げられた膣・肛門から
ザーメンが溢れ出し
切断された両足の断面から
止め処なく噴出す鮮血
←




男達に飽きられない様
肉穴を残った力で
締め付けていたが
力尽きてしまったが
彼女の屍を見ながら
初めての出会いを
思い出す……
ガン付けて来た
よな確かか？

彼女には命より
大切な物があるのか
四肢を切り落とされ
ても生き残ろうと
必死に抵抗していたら
彼等の興味を失ったら
終わってしまう……


肉穴から止め処なく
噴出す体液と
ザーメンを見ていると
気の毒になる…が
前の世界線では私を
撃つたらしいので
後悔しながら逝って
下さい

携帯を打つ手を失った
萌郁さん：潰れた眼球の
換わりに精液を詰め込まれ
息を荒げて命が尽きるのを
まっっている




皆を看取った後に
私の番が来た：
好物を最後に食すか
嫌いなものを最後に
食す主義かは知らないが
一人取り残された私が
皆と同じ場所に逝く時が
来たのだ

何をされるか最後まで
見ていた私には容易に
想像出来る
実際の痛み以外は：
ザーメンを子宮に流し
込まれる痛みはこれから
始まる猟奇行為に比べれば
快感と言っても構わない
のだから
このまま一生犯され
続けたら幸せすら
感じるかも知れない：



台の上に乗せられ手足を
貫かれ固定される
想像を絶する激痛に
脳が焼き切れそうになる…
声帯から搾り出した音は
うまく言葉にならない
「助けて」の一言すら
言えなくなっていた

肛門と性器を弄ばれ
潰れた眼球の音を
聴きながら私は
自問自答する：
「いつまで続くの？」
「苦しみ抜いて死ぬ迄よ」



信じてもらえない神に
心の底から祈ってしまった
程の壮絶な拷問だった…
切れの悪い錆びた鋸は
私を只の肉塊にした
全ての穴に注がれた
ザーメンは私の僅かな
血液とともに床に降り注ぎ
神は私の願いを叶えてくれた…

「早く
殺して」





「今度は両腕だけ
にしておこう」

男達はそう言いながら
私の腕を切り離した：
恐怖で身体が痙攣する
胸の穴にまでペニスを
捻込まれ仰け反りながら
悪魔に祈る——「早く殺して」

「次は両足だ」
男達の声が遠くで
聞こえる
鉄と精液の生臭い
匂いにまみれながら
私は仏に祈った……

「早く
殺して」

「感染症か
つまらない」
熱でうなされ死を
目前に控えた私を
男達は壊れた玩具を
見るような目で
眺めていた

霞んでいく目に
映ったのは
ゲル状になった
男とヘッドセットを
装着した男……

全てを理解した
死ぬ度に過去に戻り
拷問を繰り返した
楽しんでいたのだ……
私は何度殺された
のだろうか？

私は誰かに
祈った

「この悪夢を
終わらせて」



精神が破壊されたら

こころ

こわ

逝つてよし。

サークル 有害図書企画

代表 たなかなぶる

印刷 上野印刷様

発行日 2011年8月

<http://tanakanaburu.run.buttoebi.net/>

©有害図書企画